

滋賀県朽木におけるトチノキ巨木林をめぐる地域変容

—山村の資源利用ネットワークの発達と山域の環境変化に着目して—

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授、水野一晴

I. 研究の目的

滋賀県高島市朽木には、胸高直径 1m を超えるトチノキの巨木が数多く生育する“巨木林”が存在する。全国的にも類例が少なく、かつて薪炭材やパルプ用材の採取場であった、人の手が加えられてきた山や谷に成立するという点で特異な存在である。ところが、近年家具用材としてのトチノキ巨木の価値が知られ、多くの巨木が伐採販売される事態が発生した。この状況を受け、滋賀県は 2010 年より巨木林の保全事業を展開し始めており、同地域はまさに過渡期に直面している。

元来トチノキは朽木住民にとってトチ餅の原料となる実を生む重要な資源であり、貴重な財産であった。住民がトチノキを業者に販売した背景には、過疎・高齢化の進行や住民と山との関係性の変化が付随していると考えられる。一方で、社会や資源利用の変化は、植生の種組成やトチノキ個体群の構造、野生動物の行動様式を変化させ、山の生態系にも影響を及ぼしている。巨木林保全の議論にあたっては、保護一辺倒の視点でなく、山の生態系と人の社会の変化を総合的に捉える地域変容という視点から山と人との関係を見直し、変化に対応した住民の行動についても積極的に意味づけを行う必要がある。

以上の背景から、本研究では、朽木地域におけるトチノキ巨木林と地域社会の現状および関係性の変化を包括的な地域変容として明らかにすることを目的とする。

II. 研究の経過

本研究の進め方として、全体のテーマに関わるサブテーマを設定し、代表者と 7 名の共同研究員がそれらを分担して研究を進め、最終的にそれらの知見を総合的に分析し、全体の成果をまとめるという手法をとった。サブテーマの設定には、先行研究や前年度までの研究結果を踏まえうえて、本地域の自然環境と社会環境の両側面における変容を浮き彫りにすることを意識し、5 つのテーマを設定した。テーマの概要と調査手法は次のとおりである。

(1) トチノキ巨木の分布特性（手代木功基：総合地球環境学研究所・研究員）：トチノキ巨木や巨木林の立地環境を

明らかにするため、安曇川支流の Y 谷集水域（50ha）を対象に、トチノキの位置を GPS 受信機によって記録し、生育場所の地形を記載した。また、各個体の胸高周囲長、谷底部からの比高を計測した。

(2) 山林利用の変遷（飯田義彦：京都大学・博士課程）：トチノキ巨木林の成立における人為的側面を明らかにするため、Y 谷周辺を利用していた集落を対象に、山林利用の変遷について聞き取り調査を実施した。

(3) トチ餅とトチノミ利用の変容（八塚春名：国立民族学博物館・学振特別研究員、藤岡悠一郎：近畿大学・研究員）：本地域のトチ餅およびトチノミ利用の変容を明らかにするため、朽木の集落で聞き取り調査を実施した。また、現在もトチ餅生産・販売を行う 6 世帯を対象に重点調査を行った。さらに、朽木および大津市で開催される朝市において、トチ餅購入者を対象に聞き取りを実施した。

(4) 野生動物によるトチノミ捕食（山科千里：京都大学・研究員、藤田知弘：京都大学・研究員）：(3) の調査と関連し、野生動物によるトチノミ捕食の実態を明らかにするため、安曇川支流の O 谷を対象に、トチノミ周辺に自動撮影機能付ビデオカメラを 3 か所設置し、トチノミを捕食する動物を記録した。また、同谷の 12 か所にプロットを設け、各 25 個のトチノミと自動撮影機能付ビデオカメラを設置し、12 プロットの半数に網をかけて大型動物が入れない構造をつくり、トチノミの持ち去り状況を比較した。

(5) 行商の役割の変遷とその現代的意義（伊藤千尋：横浜市立大学・学振特別研究員）：調査地域の社会変化および具体的な生活様式の変容を明らかにするため、朽木の地域社会に古くから関わってきた行商と住民との関係に着目した。朽木の 3 集落を対象とした聞き取り調査を実施したほか、現在も朽木に販売にくる行商への聞き取り、GPS 受信機によるルートの記録を行った。

III. 研究の成果

(1) トチノキ巨木の分布特性

トチノキは、調査対象とした集水域に 229 個体が確認され、大部分が谷底からの比高 20m 未満の場所に生育して

いた。幹の直径の小さな個体（小径木）は、主に谷壁斜面及び谷底・小段丘に分布し、それらの多くが谷底部に分布していた。一方で巨木は、谷底からの比高が 10m 付近に多く分布する傾向があり、谷底に近い場所の個体数は少なかった。谷底からの比高が 10m 付近には、谷壁斜面の下部と上部を分ける傾斜変換点が存在し、傾斜変換点の下部では侵食作用が強く働くとみられる。トチノキが巨木になるまでには 200 年以上の年月を要すると考えられるため、谷の中でも地形攪乱の頻度が少ない場所にトチノキ巨木及び巨木林が立地しているとみられる。

(2) 山林利用の変遷

(1)で調査対象地としたトチノキ巨木林の立地する山林は、これまでに肥料源としてのホトラ（コナラの枝葉）採集、薪炭林施業、パルプ用材伐採、公社造林などの利用圧を受けていた。それを裏付けるように、トチノキ巨木林の近傍には炭焼き窯跡が数多く確認された。トチノミを採集するために木を残したという語りも聞かれたことから、継続的な山林利用圧の中でもトチノキは意図的かつ選択的に残されてきたことが示唆された。またトチノキは開花結実の開始樹齢が約 40~50 年生と遅く、個体ごとの豊凶差が大きいことが知られており、こうした樹木の特性から安定的な食糧源としてトチノミを利用するためにも巨木林の形成が欠かせなかったと考えられる。

(3) トチ餅とトチノミ利用の変容

1950 年頃まで、朽木の人々はトチノミが熟す秋口に実を採集して灰汁抜きを行い、トチ餅を自家消費につくっていた。その後、トチ餅づくりは衰退したが、1980 年代に栃餅保存会が結成され、朝市などでの販売という新たな目的のために再開された。そして、トチ餅は朽木の「特産品」として定着した。しかし、20 年ほど前からトチノミの採集が困難になってきたという。そして同じ頃から、トチ餅生産者は滋賀県長浜市や福井県、岐阜県の人々から実を購入し始めた。朽木の「特産品」であるトチ餅は、灰汁抜きという地域独自の技術とともに、他地域の採集者や販売者といった多様なアクターが介在する

広域的ネットワークによって支えられていた。こうした資源利用ネットワークは、過疎・高齢化に悩む山村において 1 地域では不可能になりつつある活動を、より広範囲かつ多層なネットワークによって可能にするという、新しい資源利用の形を提供する可能性がある。

(4) 野生動物によるトチノミ捕食

(3)の調査と関連し、1980 年代からトチノミが採れなくなった原因として、シカによる獣害が住民から指摘された。調査の結果、トチノキ下の数か所のカメラにはシカが頻繁に撮影されていた。採食物の特定までには至らなかったが、トチノミを捕食している可能性が示唆された。また、別の実験では、柵の有無でトチノミの減り方にあまり差がみられないこと、設置後 5 日で約 9 割のトチノミが持ち去られることが明らかになり、それに大きく寄与したのはネズミであるという結果が得られた。

(5) 行商の役割の変遷とその現代的意義

戦後から昭和 30 年代前半まで、朽木において行商はモノの売り買いだけでなく、人々の様々な生活の場面で関わり、地域社会の一部を構成していた。しかし、昭和 30 年代後半以降の人口の流出や働き方の変化にともない行商人の数は減少し、その役割は限定的になっていった。一方で、現在でも一部の行商はこの地域を訪れており、他の買い物手段にアクセスできない人（特に一人暮らしの高齢者）にとってのオルタナティブを提供していた。こうした行商は、トチノミを他地域から入手してトチ餅生産者に販売し、(3)で指摘したトチノミ利用のネットワークの一角を担っていることが明らかになった。

以上より、トチノキの伐採は、単なる森林伐採という問題ではなく、トチ餅利用の変容や資源利用ネットワークの拡大、獣害、山林利用の変化、住民の生活様式の変容など、ここ数十年間にわたる山村の地域変容の帰結として理解すべき事象であることが明らかになった。

IV. 今後の課題

同テーマに関する他地域における動向を調査し、日本の山村における構造的な変動に位置付ける必要がある。

【成果物】飯田義彦・藤岡悠一郎・手代木功基・藤田知弘・山科千里・水野一晴「滋賀県朽木におけるトチノキ巨木林をめぐる地域変容」2013 年日本地理学会春季学術大会発表要旨集（2013 年 3 月 29-30 日、立正大学）、p261；手代木功基・飯田義彦・藤岡悠一郎「滋賀県高島市朽木地域の山地源流域におけるトチノキ巨木の分布特性」2013 年日本地理学会春季学術大会発表要旨集（2013 年 3 月 29-30 日、立正大学）、p262；藤岡悠一郎・八塚春名「滋賀県高島市朽木のトチ餅生産を支える資源利用ネットワークトチノミ入手経路にみる山村間の多様な資源流通形態」2013 年日本地理学会春季学術大会発表要旨集（2013 年 3 月 29-30 日、立正大学）、p263；伊藤千尋「滋賀県高島市朽木における行商の役割の変遷とその現代的意義」2013 年日本地理学会春季学術大会発表要旨集（2013 年 3 月 29-30 日、立正大学）、p141；八塚春名「山村間の資源利用ネットワークが支える「特産品」づくり—滋賀県高島市朽木におけるトチ餅生産—」生態人類学会要旨集（2013 年 3 月 16-17 日、徳島大学）